

詩南車

第二拾一輯

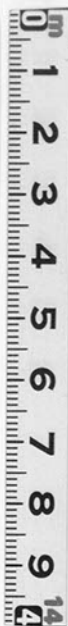


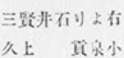
詩歌句展號

磐城

詩南社

昭和四年十月十三日印刷
昭和四年十月十五日發行
【隔月發行】





霞晚久高 波青田宮 一唯田吉 郎三保久上 家義藤佐りよ右
氏諸の貢泉小 三賢井石 子冷町水 助榮田藤 二默寄井

[illegible]

紫陽花	柏木哲
白虎隊の墓に捧ぐ	諸根 樟一
雜詠	佐藤 淡雪
波のあなただ	宮田 青波
空木の花	佐藤 義家
雜詠	明石 濱男
雜詠抄	間野 光郎
藤の花その他	久保哲朗
雜詠	島末 眞之
	金子角太郎

折々	水町 冷子
孤影	吉田 空輝
渚に立ちて	鈴木佐代子
かなしきありて	飯野秀三郎
二首	嶋田 沙路
雜詠	伊藤 三郎
悲しき道	浪藤 政男
	丘 八重子

選歌 「山・雲」 選者 高久晚霞

全國詩歌俳人短冊色紙展覽會の記

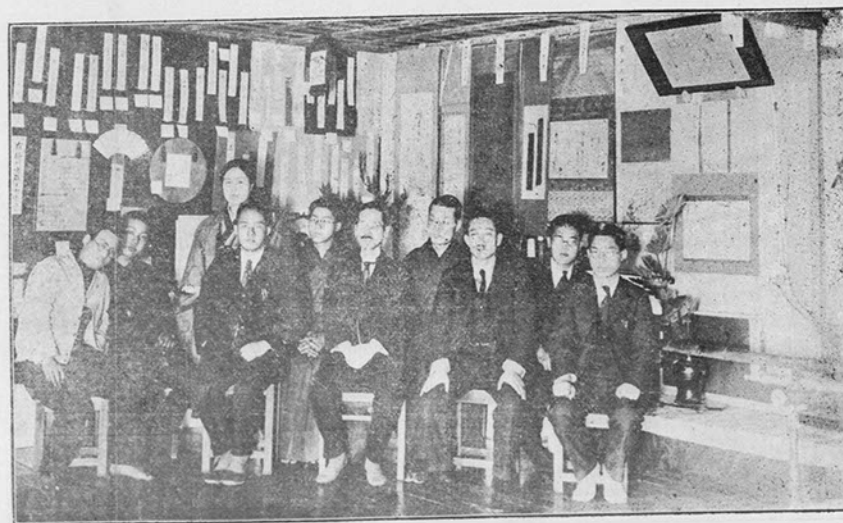
寄贈詩書紹介

編輯後記

集人八歌短



家義藤佐 二歌寄片 波青田宮 三賢井石りよ右
氏諸の霞晩久高 郎三保久上 賢泉小



霞晩久高 波青田宮 一唯田吉 郎三保久上 家義藤佐りよ右
氏諸の賢泉小 三賢井石 子冷町水 助榮田藤 二歌寄片

全國詩歌俳人 短冊色紙展覽會

(上部の詩部)

(下部の参考品部)



車 目 次

夏折々……………結城 牧秋
早H難唱……………天野多津雄
睡蓮……………高久 晩霞

短歌

新進六篇
夜……………小堀きみ江
春の感觸……………泉 れいこ
雨後の雨……………加藤まさな
うつつろ……………白石 静夫
夏にて……………岡田みのる

選歌「山・雲」 選者 高久 晩霞
全國詩歌俳人短冊色紙展覽會の記
寄贈詩書紹介
編輯 後記

短歌八集

孤……………吉田 空郎
渚に立ちて……………鈴木佐代子
かなしさにありて……………飯野秀三郎
二首……………磯田 沙路
悲しき道……………伊藤 三郎
……………波藤 政男
……………丘 八重子

春が来る

月丘きみ夫

春がくる
枝垂れ柳や海の梢の芽が
ふつくと紅らみ初めた
もう春がくるのだ

思んで居るつまも
なごやかな微笑に吹かれ蒼空を眺めては
はやくおはなみが来ればいゝと云ふ
洋服や靴を欲しいといふ
あなたも背廣の一着も買えと云ふ
ほんとうに欲しいものだ着せたいものだ
櫻の湖畔や青葉の下の野路など
二人が並んで爽颯と自轉車で走る
あゝその姿が
いんうつに因沈した僕の想念にも

故郷の朝風の懐しさで思ひうかぶのだ
だが何うすればいいのだらう
僕の胸部からは血が出る
僕には生活すらも無い
春がくる！
戀人よ

僕はどうすればいいのだらう
戀人よ

蚊

淺海與三男

俺の足先が急にかゆくなつた。
書齋にいつの間にか入り込んだ
一疋の蚊が
今・その全身を真紅にうるませ
飛ぶ力さえも失なひ・轉つてゐる
蚊よ

おまへのその姿を誰が哀れむか
どん欲な吸血鬼!!!
俺は憤怒と呪咀に燃いて
この不道德者を征伐するのだつた。

詩一篇

木村杏枝味

こゝには一つの窓もないので
僕は毎日すくけた天井をみつめてゐなければならな
い
こんなに室いつばい黄昏てきたのに
誰れも洋燈をつけてくれる人はないのか
野良犬の様に頬が痩せてしまつても
せいせいと生臭い息が肺臓の腐れ血であつても
死がどんな時に來るのか僕には解らない
コロコロコロと悲しい虫と泣いてみたくても僕には
泣くほどの感傷がない
ふるしんぶんにつくんだねばつこい血痰を枕の下に

入れて
昨日の水で喉をうるはすのだ。

海他三篇

久米のぶ夫

海はしぶきのあつまり

岩に
鵜が群れてゐます

松

濱邊の松は
皆まがつてゐる。

求める

盲人には
杖が
何よりの便りなのです

撒水車

寺原迷二期

暑い陽射の午後
真白く一本はつきりと彫みつけた
かわいたアスハルトが
午後の倦怠を人通りの少ない道路へ
流出してゐる

街路樹の木蔭に撒水車が
居眠りして
私とその撒水夫です

秋

秋日によく磨かれた
ガラスの林檎

古びた九谷焼の水瓶に
秋の風景を寫してゐる

夜行

旦野草笛

墓場のようにつめたい闇を
わが汽車は走つてゐる

狐火よ

狐火よ

あゝ、はつかりとやさしく
その情炎をたいてはくれないか？

旅愁

街の灯も

星のいろも

昨夜とかはりはないようだが……

どこやらで

三昧の音が

しめやかに郷愁を泣かしめてゐる

撞球場にて

細川 芳雄

眼のさめるやうな
青羅紗の上にもろぶ
二つの赤い球と
二つの白い球と
私はビードの窓から
見てゐました

滑らかなクッションを辿つて
象牙の球は
生きものゝやうに
台の上をたくみに
泳ぎまわつてゐます

けれど 若しも
赤い球が
一つしかなかつたら
それはあまりに
悲しい遊戯です。

夜

小堀 きみ江

こともなき日はくれ
不思議な夜がおまつれ
こよひも赤命の花びらが散る

赤坂の花

繁りあふ
草むらかげに
うなだれて涙乾かす
荒草のしひたげのまゝ
秋またで土にこぼるゝ
かみのむれたゞしく受けて
哀しきは赤坂の花よ

春の感觸

泉 れいこ

朝露の向ひ
なつかしみつゝ
辿りつきたる
生垣の彼方に
われ呼ぶ人の
ある如き……
ほのかなる息つき!!!

雨後の朝

加藤 まさを

露國光る
あかつきの道のべ。

遠々と、牧童の
口笛に展げし心地す
縁際立てる丘

戀人の眉

微笑零るゝほごに
涼しくも澄みて

快よき昨夜の雨音
割のこゝ、いまさらに
心に應ふ

うつろ

白石 静夫

夜となく
悲となく
われ かすかなる
音をきく

そは土を掘る
音にも似たり

昨日も
今日も

胸深く
われかすかなる
音をきく

(赤きさくろの花散りて
わが心
いよゝ うつろに)

夏にて

岡田 みのる

滴る夏の縁りに包まれて
ゐても

私の心は ぢつと
奥底の風に耳を傾けるのです

輝しい夏の太陽をあびて居り
乍ら

私の心は遠く
枯野をゆくのです

私は
青い芒にキリギリスを聞き
なぞか しみじみ
人生の黄昏を思ふのです。

夏折々 一日一歌の中より 結城牧秋

けうとき身をもてあます梅雨あけの雨むしあつし初蟬のこゑ
もらひ來し梅をかこみて子らに食はせおのれも食へり老いしわが妻
蚊やり香に落ち來る虫をはきはぢき今宵めつらく本讀みにけり
土用入りをひと雨降り更けにけり地虫がなくと聞きてわがゐる。
朝の間の落つき心たもつ眼に見入る木槿花のしづけさ。

旱日雜唱

天野多津雄

遠雷のいつしかやみて月夜なり庭にしづけき秋蟲の聲
長旱に萎え細りたる秋草にささやかなれど花咲きにけり
長旱の埃を浴びて庭隅の桔梗の花伸び細りたり
雨雲は外れて甲斐なし涸河に萎えつつ白し月見草の花
早雲はつかちぎれて流れゆく天空青く晴れまぶしもよ
たたなはる山あひに見えて動かさる真白き雲は夏の雲かも
故郷の羽黒の嶺呂に立つ雲の白々として朝明けにけり
露支衝突の報しきりなりにかくにゆらりと高し向日葵の花

雜詠

大久保哲朗

茜さす高嶺煙の花一は胸をかざりて
山なくだれり
あさ海の小魚飛々び白雲の影をうつ
して潮光りおる
胸やみて床に臥したる吾が妻はグ
ヤ咲きやさ朝まだきさふ
さんばしの水の青さよ放浪の子は汗
ばみて船荷はこぶも
げん海の波のとはぶき荒々し對馬の
濱は鳥影にみゆ

藤の花その他

島末眞之

盛りの藤の垂花美しく映りて池の水
静かなり
池水にとゞかんばかり咲き垂れし白
藤の花に雨静かなり
池の面に散り浮びたる藤の花夕かた
まけてかたまりにけり
藤の花垂れ静まれる夕間暮池面を跳
れる鯉の音すも

睡蓮

高久晩霞

汗えにさるのみの香高く彫られてし御像たふとし魚籃觀世音
ありし世に彫りのこせるを刻むとて飛彈の名匠の現し世に來し
(本多朝忠氏に)

わが庭の睡蓮咲きぬ松月のショウキンドウの菓子如くに
睡蓮は備後表も及ばじと座せる蛙のしばし動かす (睡蓮)
父の聲きくべき今日にあらねどもわれ獨り居て淋し木兎莊
たらちねの靈に告げまは住む家のめでし形をなが子造りしと
(木兎莊)

わが畑の裏の河原に子等と來てたはふれにつつかしづけし
夕暮の河の面かなしわが上を流るる『時』もかくて歸らず(好間川)

紫陽花

柏木哲

女にはうすむらさきの蛇の目よし顔紫陽花の如く見ゆれば
吾子二人弟五つ兄七つ喧嘩するさへたのもしく見つ
砂山に子等と腹ばひ六月の會瀬の青き海を眺めぬ
糧のごと酒をはりする吾がさがの悲しからずや四十にして

雜詠

金子角太郎

竹尾氏の我が故郷の旅歌を我れうれ
しみて友に傳へき
本買ふにあれやこれやと逢ふ時ふと
目に觸れしケハリーンの記
園藝の趣味持つ我を親友はケルシエ
ア趣味と罵りにけり
聴き馴れし我が國體の世界無比今ま
た聴きて氣持よかりき

折々

水町冷子

つかれたる夕べ河原にわたりたてば岸
の若草青にひかれる
石ころの多き河原を踏みゆきてつめ
だき砂に足なげだしぬ

白虎隊の墓に捧ぐ

諸 根 勿 來

飯盛の山に眠れるうら若き勇士に手向けぬ白ばらの花
伊國より贈りしといふ碑の前に佇み仰ぐ大鷲の翼

雜 詠

佐 藤 淡 雪

錢湯におしろいつくる女あるをうらやましげに吾子はそのぞけり
花園に舞ふ蝶を見し幼な兒は下駄ぬきすて、追ひまはるかな
やきつくる暑さも知らず木立深き家ぬちに聞くみん／＼の聲
花咲けど又夏來れど我のみは一人さびしくにはとりの友
新柄を買ひあたへけり吾子をおきて母失ひし少さき妹に

波のかなたに

宮 田 青 波

見送りの小舟どよめき我が艦に添ひて驅せれり危きさまに
(小名濱出港)
しろじろと明けにけぶらう鹽屋岬を波のかなたに見つゝ我が行く

陽炎の上りてあれは正の野邊に春來
らし青柳の枝
春なれどもだして憶むおめあり人
戀ふ心せつなるものか
啄木の歌集の頁繰りゆけば誰が入れ
たりし矢車の花

雜 詠

吉 田 空 蟬

あかきさのみ空に残る淡月を見る目
にちかしさく起き出で、
雨あがりすがすがしも縁濃き葉蘭
をうつす池の水の面

孤 影

鈴 木 佐 代 子

こゝだくのうからさ住めども獨りの
己に慣れて久しくは經し
世の常の人の心のすこやかさ吾れも
たもちて語りてみたし
ほゞ星まきに見ゆるやさうち仰ぐ
空に天の河ながれをり

灰色の小山に似たる五十鈴艦旗あざやかに靡けて驅る

黒き鳥浮つ沈みつ太平洋の波にもまれて餌やあさり居る

松島の入海近く水先夫垂重網振り高らかに呼ぶ

(加波山の事治りて、父北海道に送らるる途、この海を渡られしを思ひ出て二首)

ちゝのみの父の渡りし大洋を我れ黒艦に委ねて驅せる

この海を憐み渡らす父なりしとはかなき思ひに我れ驅り居る

(石の巻より金華山へ)

鮎川の岬にいたれば船客は鹿群るゝ見つゝさわめき立つも

餌を撒き與へよとてか鹿の群かなしき聲に角すりよする

空木の花、その他

佐 藤 義 家

葉草かる乙女の置きしその籠にちかく空木の風にゆらげる

朝露にしどゝなる苗手に取れば陽光のさしてその苗黄ばめる

かけ過ぎて排水せむと水無口をあくれば蛙も流され出でぬ

水ぬるむ稲田に苗を挿しにつつ日笠仰げば一日ながしと思ふ

(田 植 後)

渚に立ちて

飯 野 奔 二 郎

砂に残るわが足跡をかへり見てふさ
ありし日をしたわしく思ふ
しめやかにしめりし砂を踏行けばさ
く／＼といふ音のすがしき
世をすれし反逆の子のかなしさは海
に來りてひねもすを暮す

かなしさにありて

磯 田 沙 路

かなしさはわたのつからなる心なり嫁
きにじひとをひた燃ひわたる
かなしみの永久に消え得ぬかなしさ
を酒にまぎらすかなしさこゝろ
たゞひさり君はゆきけり北國の尼僧
の心いとほじみつ
涙して誓ひしこそこそぞの日のは
ぶれこととなりてはむかな

澄む空の廣々しもよ今日もまた垂穂にまちる稗引きくらす
おはきなる蜘蛛居て庭の松の木に蜻蛉をとらえ食みつゝあるも

雑詠 明石濱男

くれなゐの日のいろそめてむくむくと山の上に立つ夕立雲かな
紺青の眞空にとべる白雲のその白雲のいやはて知れず
遠つ方の高き山なみさみどりにつくらうけしきこの窓ゆ見ゆ

雑詠抄 間野光郎

若き日の夢はいつしか消え果てゝ吾れに鶏飼ふ今日の來にけり
なれぬ手に胡瓜植ゑんと畑うてばみづ多く出で氣味悪きかも
山路ゆけば若き女のたゞひとり田をうちをりぬ初夏の夕
憂しと思ふこの山里に五たびの田植の唄をきゝにけるかも
社會事業はいのちなりとぞ云ひつゝも名のみに走しる君にあらずや
ひつそりと静もりてある山の寺に海の音のみ遠くきこゆる

二首

ねとうさぶらう
逆さし人の名に同じなる註文の封筒
に種々の思ひ出りあり
カタコトと時計の音す悲しかり静も
れる夜のひとり思ひは

雑詠

遠藤政雄
祭には風か雨なぞ降るさ云ふ村人の
言を我は信ぜず
葦陰にかそけくゆらく人のあり書の
陽受けつつ丸き音の見ゆ
わけもなく都戀とき我なれど往く術
もなくただ聞えけり

悲しき道

丘 八重子
何ごさもうち笑まひては過ぎて來し
憂き身の果てのあきらめ心
今さらに棄てもかれたりこの命死よ
り悲しき道をたざれど
君と見しほのかに白むあかつきの星
に別れをなしみけるかな

課題 雲山 高久晩霞選

雨晴れの山路を行ば親もよ諸木の匂ひしきりにかゞよふ
名も知らぬ小鳥しきなく朝明の山の静けさ小霧立迷ふ

島末眞之

山復の樹立にかゝる薄雲の廣ごりにつつ風の涼しき
吹風に山の草木は揺れ揺れて續く山脈動きて見ゆる

渡邊確太郎

街見ゆる裏山にわめく子等のあり軍さ遊びの旗かざしつづ
雲低き山の麓に陽の映けて家路に急ぐか子等の群見ゆ

四家春水

梅雨空のきれぎれ雲は青空を瞬く間なく埋めおほりぬ
見出でたり密雲ややに分れ行ける紺碧の空にわが赤井岳

佐藤義家

黒雲の群がり立と見てあれば眞上の空に雷鳴りぬ
向山の青葉黒みて鯛のいそがしう鳴く夕べ悲しも

中島修二郎

去りかねてハトの街の夕空に茜の雲をしばし見入りぬ
向山のなぞへに見ゆる夏雲は光りを持ちて動くともせず

秋野ふみえ

そのかみのおほち持ちし山に來て鯛の聲きき入りけり
我泣かは母も泣かど唇噛て七月の雲見上げて立てり

宮田青波

山行は陽射危うくなりけりふと見し麓雲立おほふ
花淵の峯にゆゆしき雲湧くと思ふ間もなく風舞ひ來る

清野榮二

向つ峯に雲はかかりて吹く風に煙は低く雨來るらし
手折り來し草花もわが手に萎えてたそがれ時を山寺の鐘

選者

むくむくと八道雲の立ちにしかど夕立も來ず暑さに
暮れぬ

池の面にさやに寫れる山と雲と風折々の波にくづる

次號課題

「旅」(旅にて、旅の思出し)五首以内

昭和十一年十一月十五日迄

晩霞氏宛の事

詩南社 主 催 全國詩歌俳人短冊色紙展覽會

昭和四年四月十三日より三日間
詩南社主催磐城文藝協會、磐城新聞社、常磐毎日新聞社、磐城時報社、好問十好會後援の下に福島縣平町藤田女學校に於て全國詩歌俳人の短冊色紙展覽會を開催す。
出品物は全國的に亘り約一千點數近くの出品を見三日間總入場人員が四千人以上の好成績にて、非常なる盛會裡に會を閉じたり。
今その日の概況を記せば左の如し

1 出品に就いて
▼出品總點數九百七十三點
内 譯 冊 二三八

色紙	九八
原稿用紙	一七三
畫線紙	一五
軸	二五
扇面	七
半折額	五
編額	二
繪額	三一
書畫	二〇
版畫	二五
その他ハガキ	二
鍋蓋	一
壺	一
模型籠	一
生花	二
京封筒	五〇
全國同人雜誌	二七八

▼その内參考品を引いて見ると
參考品點數一百五十點
内 譯 冊 七〇
色紙 一九
編額 二五
軸 一
畫線紙 八
繪ハガキ 一九
壺 一
扇蓋 二
鍋形 一
人形 二
模型籠 一
2 觀覽者
▼三日間總入場人員
四千二百五十一人
内 譯 冊

第一日(四月十三日)土曜日
入場人員一千二百七十八人
内 譯 冊

一般觀覽者
男 二五七人
女 二八六人
學生
男 一六〇人
女 五七五人
第二日(四月十四日)日曜日
入場人員一千四十一人
内 譯 冊

一般觀覽者
男 二二二人
女 三四七人
學生
男 一〇五人
女 二六七人
第三日(四月十五日)月曜日
入場人員一千五百三十二人

内 譯 冊
一般觀覽者
男 一四〇人
女 六五〇人
學生
男 五九五人
女 四四七人

▼三日間を通じて見るに第二日目の日曜日が入場者が最高を示す事を豫想してゐた所、相惜午後から雨で期待を裏切れてしまつた
又男女別入場率を見ると女が男に比し約六割の多き入場率を示してゐるかゝる催しには珍しい事である、一は會場が女學校のためと一はバザーが開かれて居たためで止むを得ぬ現象である
男女別入場人員
男 一千五百七十九人

女 二千五百七十二人
内 譯 冊 一般入
男 六百十九人
女 一千二百八十三人
男學生八百六十八人
女學生一千二百八十九人
3、費用
▼こんな事を書いて、いゝか悪いか知らないが、今後やる人の爲に參考迄に書いて置く
收入 五拾參圓
(町内一般有志から寄附)
支出六拾參圓五拾一錢
内 譯 冊

一、拾五圓七拾錢 會場設備費
一、拾三圓五拾錢 印刷代
(案内狀、傳票)
宣傳ビラ六千枚
一、八圓四錢 外交費
(三春、川前へ出張旅費)

- 一、九圓二拾錢 寫真代
- 二、二圓五十錢 自動車宣傳費
- 一、一圓七拾錢 短冊色紙代
- 一、七圓八拾七錢 雜費

(同人食事、樂代其の他)

一、五圓 會場使用禮

差引合計拾圓五拾錢缺損

(詩南社負擔) (片寄記)

4 日 誌

第一日 四月十三日 (曇)

二晩の徹夜まで除儀なくされた
出品の整理は一通り済み會場の
整頓も隅なく完了して茲に花々
しい開場を告げる事になつた
會場内を大體詩及び繪の部と短
冊色紙書畫の二部にしたが當日
は女學校にバザーが開れた爲め
交際の會場を都合されづ一教
室を當てられた様な譯で狹隘此
上もない有様であつた

加之當日となつてから参考品の
搬入が方々よりあつた爲め一部
謝絶や掲載曳れの己ない迄にな
つた事は申譯ない次第である
午後より自動車を騙つて町内を
宣傳する初日の人出としては午
前中相當の人員が重つたのにこ
れ以上宣傳試みたなら如何であ
らうと思つた宣傳に繰出す面々
は横溢そうな元氣ではしやいて
居る

四時半會場閉鎖此日の延人員一
二七八人最初の一日としては先
づ成功の域と信ずる

(佐藤義家)

第二日 四月十四日 (午後から雨)

一、二、三……六つの頭が並ん
でゐる、一つが動く、鈍い光がガ
ラス越しに流れ込む、花曇りらし
い、城山の櫻が和らかく浮き出

て恍惚とさせる、まつ黒な女學
校の教室、不調和な柔な光澤あ
る夜具、藤田校長の心盡した、
うむ朝か？ まだ寝足りないの
かどれも頭が上らない。昨夜は
殘務整理や詩南社の製本それか
ら物めづらしさから遂に茶目氣
タツブリでハシャイでしまつた
寄宿生のためにと藤田校長の注
意に驚いて寝たのは二時過ぎだ
つた。Kが今日は日曜だゆつく
りしろよ、蒲團を被て横着な事
を云ふ、もう六時半だ！しぶし
ぶしてると寄宿生が掃除に來て
呉れた、一度にこつたかへした
Kのカッコウつたらない。やつ
と朝飯にありつく頃にはもう八
分の入場者でバチクリ／＼
好開第一校の吉田先生が見える
と續いて校長始め抱夢、青峯の

諸氏等が觀稱される肩すり合ふ混
雜で一々見分けがつかないが日曜
の故か家族連れの學生が目立つ、
十一時佐藤平第二校長夫妻が來場
夫人と妹さんが夕景まで熱心に見
入られる、晝過ぎて之からが又ひ
と騒動だ……しと／＼と雨の音が

する憎い雨が降つて來た道路はし
つとりして少しづつ、足が遠くなつ
て來た、午前の忙しさに辟易して
居たのだ、一同ヤレ／＼と重荷を
下した様な氣持だ、雨をおかして
來られる熱心な同好者のためには
反つて幸な雨だつた、耕影、天仙
竹尾顯の諸氏、萩原夫人も前日
に續いて來られた、賑かな談笑の
中に夕迫る、おしい時間だが切
となる、一通り整理が済むともう
トラブやかかるたが運ばれて來た、
學校の方々の行き届いた心遣が殊

にうれしい、丹野君がこの朝發病
されて歸宅されたのは遺憾だ君を
氣遣ひ乍もにぎやかにこの夜は終
るあすの契約品の引渡の一騒動を
夢みながら(宮田青波)

第三日 四月十五日 (晴れ)

いよ／＼今日は最終日となつた
前二日間は吾々に身心共に疲勞
を與へた。併し今朝のからりと晴
れた春の朝を迎へて復び元氣をだ
し開會の準備に急いだ。冷氣に満
ちた會場も午前十時には満員とな
り午頃までには嫌惡さへ生ずるほ
どの盛況を呈した、午後二時に記
念撮影となり、後から後から觀覽
者がひつきりなし入り室内がハチ
切れそうに撮影どころが大混亂に
落ち入り到着入場を拒絶してしま
つた。午後二時半より一般希望者
に對してレターペーパー並に色が

みに肉筆の詩を贈呈することに
なり、午後四時盛會裡に閉會し
た。こゝ三日間に亘りかゝる催
しが警城文壇ひいては廣く吾が
文壇に對してあるなにかを
與へたことの小さくないことを
感じてゐる。併し私はそれが單
に文壇に對してのみならず一般
者に對していかに大きな感じを
與へたことであらうか？

私は後者に對する印象の如何に
大なる事に對し切に感じてゐる
又かゝる催しが單なる催しでな
く、一つの意義を持ち一つの理
想をもつてなされることに私は
深く嬉ぶものである。かゝる事
業おへて今後の詩南社の發展を
祝すると同時に益々警城文壇の
將來を祝しつゝ、擲筆することに
する(元)(上久保三郎)

十一月廿四日
会場未定

文藝講演會

講演、詩朗讀、脚本朗讀
童話

三野混沌 雄野勇 高瀬勝男
松本純一 石川武夫 佐藤好實
片寄歌二 今井好美 松村清
(順不同)

月丘きみ夫序・白路同人跋
井上逸夫序詩
淺海與三男詩集

四六列美裝
送料五十錢

詩集 今日から明日への手紙
い、詩とは、新らしき詩とは、技巧や形式の問題でないのだ。眞の詩とは思想的把握性の有無に依つて決定される。若しあなた方が新らしき時代意識に社會我の芽生えに出發したわれわれの詩を求むるならば私達は此の詩集を薦めよう。誤られざる本流を彩る純情な一本の光線である
(月丘きみ夫氏評言の一節)

拾月下旬發行 東京市外目黒町上目黒二〇二
白路社

短歌會

期十月十九日(土)午後四時より八時迄
於平町田町高久病院内木兎荘
會費二十錢(當日持参の事)

課題 柿、木兎(かみ) (各二首づつ)
課題は十八日迄に曉霞氏宛送附の事
同時に出席の有無を必ずす附記され度し

受贈詩書紹介

四月九日 十月十日
(詩歌誌)

猿 曉 聲 路 潮 赤道
血線 指點 白路 破曉 詩線 詩隊
海島 鳩笛 流星 曉鐘 瑤々 蒼空
詩炎 青窓 曉聲 若葉 草原 和泉
喇叭 天國 墳土 野生 旅人 和泉
瓜紅 山彦 結草 真理 黑船
格丹空 詩騎士 詩短冊 子守唄
放箭線 刷線士 短唱園 ホブラ
羅芥子 太陽樹 機重機 みなと
花言葉 詩人座 公孫樹 ダンケ
第一線 詩火線 銀線曲 地平線
人生派 晝と夜 近代街 菊詩人
未耕地 果實園 無軌道(廣島)
白畫像(仙台) 白畫像(台北)
新進詩人 金剛詩人 水戸詩人
大和詩人 生活詩人 聖樹詩人
東北詩人 詩人劇場 地上樂園
山形詩人 民話月刊 岐阜民話
空と樹木 藝術解放 みちづれ
女人文藝 青服の歌 東播藝術
廻轉木馬 しばふね 廻り舞臺
新進創作 かぐのみ 文藝尖端
田園尖端 鬼怒文學 北陸文學
高原風景
労働藝術家 夜會服詩人
東京灣詩人 バリケード
うらみつば 新世紀藝術
スローガン プロノウタ
太陽と通風筒 東洋大學詩人
瀬戸内海詩人

詩集

平澤貞二郎著
街の小民
東京市外中目黒五八二
章華社
故中島春實稿詩抄
小さき玩具
大阪東成區大今里六〇二
詩人劇場

紙蒼之助著

第一の散歩
東京市芝區三合田町二ノ四
指點社

淺野紀美夫 伊藤耕人共著
石原政明 佐藤學治
怯える者の叫喚
名古屋市外天白局區内
一千年社

石原政明著
裏長屋より
名古屋市外天白局區内
一千年社

塚本篤夫著
満れた行燈
兵庫縣武庫郡住吉村坊ヶ塚
文潮社

淺海與三男編輯
白路 20SEN
純文藝誌
發行所
東京市外上目黒二〇二
白路社

パンフレット

玉川雄介著
ひとりみち
札幌市北千條四丁目
北海道藝術協會
池田比呂志著
白い雲
神戸市真野町一四六
詩情發生社

前田重夫著
紅百合
岸和田市堺町五九
紅百合社

詩集
雄野勇著
顔と樹
山形縣南村山郡上ノ局
區宮脇
北方詩社

ウエル萬年筆
M、C、K、金ペン 特約店
ライト萬年筆

平町字搔通小路
魁文堂
電話三一三番
振替仙臺三〇六九番

美味しいマツモトのパン

食パン 一斤 十六錢
アンパン 一個 二錢
各種パン 一個 五錢

平町四丁目
マツモトヤ
電話二一四番

色紙、短冊、各種

壽坂本紙店

平町一丁目
電話一八番
振替東京六六一七番

いや……君、見違ひたよ
いや……洋服を求めた
いや……コレカネ……
例の「ソレ」



正札堂

編輯後記

◆大分長い事休刊致した。経済的の缺陷もあつたが知れぬが、同人達の繁務で止むを得なかつた。こんな事は言譯にならぬが理窟は披にして教して戴きたい。
◆緊縮の折からして剪刊に改め大分頁を削減した。従つて全体を通じて紙面寒あいの爲め狭苦しい感じがするが、慫を云ひば限らない。体裁よりも作品本位、ディレクタンテイズムな編輯とは絶縁である。常分の体裁で行く。
◆展覽會は寫真でも觀覽の通り豫想外の盛況であつた。僕等の手であつたものが出たかと思ふと嬉しくてならない。出品點數約 千近く、四千人の入場者を得れば地方として非常な成功だと思ふ。當日の事は同人が詳しく書いておいたから讀んで戴きたい。
◆斯様な仕事は同人の團結と熱をまたなければならぬ。僕等の同人は皆な熱があり、血があつた。はち切れそうな元氣で一杯だつた。共に血の出る様な奮闘をし

て免れた、だからこそ僕等の仕事が出来たに完成したと云ひ得る。僕は主體者の一人として同人諸兄に心から禮を述べる次第である。
◆尙ほ當日若山喜志子女史を迎ひて講演會を開く豫定であつたが若山氏の都合で無期延期になつた。
◆本號腰谷氏の題字は先號と違つてゐる。改判のため従來のものは大き過ぎるので改めて書いて戴いた注意迄に。
◆受贈誌が夥しき數に上つてゐる。一々發行所名を擧げて紹介したかつたが、餘頁がなかつた。よつて受贈誌集のみを批評はさしひかへて外観だけ紹介をした。皆な真の詩集ばかりである。諸君に一讀を薦める。
◆力強い熱のある同人を求める。僕等の仕事に理解を持つて一緒に働いて呉れる同人が欲しい。一人でも多ければそれだけに餘ある人多くを望む。
次號は十二月十日必らず出す。

詩南車 第四年

定規稿投

論文・短篇・感想・詩
短歌・俳句等
宛名 福島縣平町五丁目詩南社宛
短歌(十首内外)
福島縣平町田町
高久病院内 高久院廣氏宛の事

第二十二輯原稿締切十一月十日

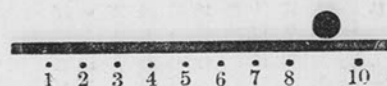
昭和四年十月十三日印刷
昭和四年十月十五日發行
頒價十錢 送料二錢

編輯人 片 寄 歌 二

發行所 福島縣平町五丁目廿八
詩 南 社

印刷者 鈴木 實
印刷所 常磐毎日印刷所

同人募集
同人は同人費として發行毎に三部の額本を受
同人は詩南車
同人は佐藤義家
同人は宮田青波
同人は片寄歌二



K • K A M A Y A

高久病院

院長 醫學士 高久 忠
副院長 新潟醫學士 赤竹 清
藥局長 藥劑師 佐竹 雄
平町田町 電話五二三番

萩原齒科醫院

平町 南町
電話二五九番

三遠文庫